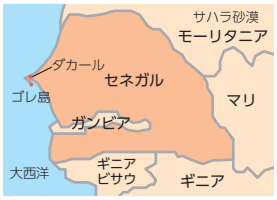
フォトエッセイ『国境なき音楽紀行』

第5回　セネガル　～俳句、ダカール、太鼓の神様～



日頃、音楽を通して人々と交流し、世界各地を旅することが多い。これら旅の印象と感動を、フォトエッセイという形でほんの一部でも日本の皆さまにお届けできればと思う。

平井元喜

ゴレ島の小学校で出会った子供たち。植民地時代の趣を残すゴレ島は、かつて奴隷貿易の西の拠点で、1978年に「負の遺産」としてユネスコの世界文化遺産に指定された

セネガルに四季はない。乾季と雨季があるのみである。しかし、「西アフリカのパリ」と詠われる首都ダカールは洗練された文化都市で、国際的な俳句コンクールが36年前から開かれている。

今年4月、俳句と音楽のコラボレーションなどの仕事のために訪れた。13日、在セネガル日本大使公邸で各国大使らのためのサロンコンサートを行い、15日の「第28回俳句コンクール授賞式」では、上位入賞5作品をテーマに即興でピアノを演奏した。

思い出深いのは、機関銃を持った50人もの警備兵に守られながら国立ダニエル・ソラノ劇場（1100人収容）で行った16日のピアノリサイタルだ。終始「アフリカ的」ともいえるハプニングが続いた。

セネガル人はのんびり集まる。北原隆日本大使の仏語でのスピーチが終わる頃、会場は満席となり、一時間近く遅れて演奏会が始まった。ベートーヴェン、ショパン、リストなどの他に、吟遊詩人ラファエル・ンジャイ氏と北原大使夫人がウォロフ語・仏語・日本語で芭蕉と蕪村の古典を吟詠し、私の新作『ピアノと朗詠のための「四季の俳句」第1集・第2集』の初演も行った。

休憩後、舞台に戻ろうとすると〝パーカッションの神様〟ドゥードゥー・ンジャイ・ローズ氏（06年、ユネスコの無形文化財に認定）が「乱入」。彼の息子や孫10人からなる太鼓グループと私は〝炎のジャムセッション〟とも言える即興を20分ほど続けた。コンサートは3時間に及んだ。

目をつむるとアフリカの大地が見えた。4ヶ月後、〝アフリカ音楽の巨星〟ドゥードゥーは突然この世を去った。85歳だった。

人種・言語・宗教の壁を超えて、音楽は人の心に直接響く。そして、音楽を愛するという一点において、世界に国境など存在しない。この信念を胸に私の旅は続く。

レブ族の漁村ヨフの浜辺に横たわる小舟と二組の母子。

ダカール港からゴレ島へ向かう船中で出会った学生たち。

撮影：平井元喜　（本人の写真を除く）

ひらいもとき

ピアニスト、作曲家。73年東京生まれ。桐朋高校、慶応義塾大学文学部哲学科、英王立音楽院大学院卒。これまでヨーロッパ・中東・アフリカ・米国・中南米・アジア各地を演奏旅行。米カーネギーホール、英ウィグモアホール等でしばしばリサイタルを行う。2016年は、バービカンセンター、セント・マーティン＝イン＝ザ＝フィールド（ロンドン）、コンセルトヘボウ（アムステルダム）、コンチェルトハウス（ウィーン）、銀座・王子ホール等でリサイタルを予定。音楽を通じて平和・教育・医療・環境問題にも積極的に取り組む。3.11以降、復興支援コンサートを続け、1,500万円以上を被災地へ寄付。07年よりプロジェクト「日本の民話・絵本を世界へ」（朗読・音楽・映像のコラボ）を芸術監督として主導。本年はミラノ万博2015にも参加。NHK文化センター、時事通信社トップセミナー等で講演。BBC、NHK、テレビ朝日「題名のない音楽会」などテレビ・ラジオ出演も多数。96年よりロンドン在住。

今年8月に永眠した人間国宝ドゥードゥー・ンジャイ・ローズ氏（写真右端）とサバール（セネガルの太鼓）・グループ。ピアノは筆者。躍動感あふれるドゥードゥーの音楽は「生命」そのものであった

俳句の朗詠とピアノのための新作の初演風景。芭蕉や蕪村の句を挿絵とともに3カ国語でスクリーンに映写し、「日本の四季の心」をセネガル人に紹介した

世界各地から700句余りの応募があった第28回俳句コンクール授賞式とレセプション（於：大使公邸）。駐セネガル日本大使夫妻や受賞者らと

平井元喜公式ウェブサイトにて旅の写真を公開中。もっと世界の人々や風景を見てみたい！という方必見です。 www.motoki-hirai.com